The Women's Magazine

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 33. 第參拾參號

EDITORIAL: On Proposed Improvement of the Japanese Stage; Man Commingling with woman in Society.

LEADING ARTICLES: Education of woman and method of Spreading Christianity.
By Prof. M. Toyama.
Books and Reading.
By K. Kimura, M.A.

MISCELANIES: The Model Style of woman's epistolary writings; Desultory Remarks: No. IV; European Etiquete: No. XI; Items on woman's domestic work.

BIOGRAPHIES: A Blind man's wife; Mrs. Kaibara; Mrs. Matsuyama; Life of Baikōjoshi: No. XV.

CORRESPONDENCES.

GENERAL NEWS.

ADVERTISMENT.

●社説 演劇の改良○男女交際論

●叢話 女の文○女學隨筆(第四)○西洋禮式(第十一)
家政心覺

●論説 女子の教育を論じ併て耶穌教擴張の法を説く(第三)外山正一君○讀書の要を論ず(木村熊二君)

●佳傳 貞女夫の眼病をいやせし事○貝原篤信の妻○松山天姥の母○梅香女史の傳(第十五)

●寄書 歌○今様○板谷ゑみ子の傳

●新報 十二則

●廣告

●笑ひ草

(一) 女學雜誌とかけて○貞女の傳紀、

(二) 女學校とかけて○老女の集り、

(三) 今日の文明國とかけて○英吉利の女王、

(四) 治りの善い家とかけて○夏の夜のうたゝね、

(五) 出世する亭主とかけて○花にあらし、

面がわるくとかけて○何と解く○名高い歌よみ一人、
こゝろは○きのつらゆき

多葉古のはを取て田舎へ送る○ありもの一に解べ、
たいこ○とある

爪を十に山椒五粒とかけて○寒中よ河をわたる、
こゝろは○つめとう御ざんせう

夏の夕立とかけて○何と解く○やくわんわたま、
こゝろは○ふるなるひかる

(一) こゝろは どうか女によませたい

(二) こゝろは 女のはおしが多い

(三) こゝろは 女が男を支配する

(四) こゝろは 蚊あいがいゝ

(五) こゝろは 内房がいゝ

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第參拾參號　明治十九年八月廿五日

● 社說

○演劇の改良（上）

西洋演劇の由來をきくに初めハ酋長英雄なんどの功德を追慕するが爲に其の事業經歷を演して一にハ故人を賞賛し二にハ今人を奬勵したるものと云ひ一説にハ僧徒等が經文を俗人に說敎するとき天國の有様地獄の苦脳なんどを目前に示さんとて自ら寺院内に演したるより起るとも云へりその起元ハ甲乙の孰れなりとも其後ち或は敎導勸善などの主意をもて之を演することもあり或ハ人間の困苦するさまを示し又ハ當世の有のまゝをうつすなどの目的にて之を演することとなりセキスピア出でゝより面目を一變して遂に今日の有様となりしなど數度の變化を經たるなるべし然るに今尚ほ一方にイタリア風の演劇あれバ此方にフランス風の演劇あり其他英國によしとする仕組と米國に流行する脚本とハ自ら其様子を異にし彼此互に長を誇りてますく改良を怠らざるを見れバ今後また古來の如き大變化を生ずべき望なしと云ふ可らず。次に我國の演劇の由來を考ふるに亦いろくの説ありて容易に論定することハ然知けれども最初神々の功德を賛美するの樂會ありしがのち漸く猿樂となり猿樂ハ時代と共に趣味をかえて田樂、能舞、狂言なんどに分れたるならん然るに田樂ハ亦代々の風俗と共に變化し遂に念佛踊ともなり又た歌舞妓ともなり歌舞妓ハ一變して漸く今日に所謂る演劇とハなりしならん然るに演劇の模樣も亦た次第くに變化し維新前迄ハ川原乞食と卑しまれたるものゝ其後ハやうくに地位を高ふし舞臺に新聞物を演すると共に俳優も亦た交際社會に立入ることもあり貴賓連ハ之を敎導職の地位に置て愛顧するに至れること是亦非常の變化なり去れバ演劇を時世と共に改良して日々に新なる趣を得さすることハ東西すでに一轍に出で古今同様の經驗あることと云ふべし然るに現今我國ょ執行する演劇なるものを見るに其の田舍にあると三府にあるとを問ハず所云る田舍芝居上舞芝居なんどの類は亦た言ふに及バず東京府下にありて日本第一と稱さるゝものを見るに俳優の中にハ多少有爲の人もあるべく世話方にも奮發せる者尠かるまじく作者にも相當の人物ありて言ハゞ日本演劇の粋を拔きたる場所なるに尚ほ世上有識者の不滿足とする所ろ甚多し抑も演劇ハ美術の一なり之を解說すれバ或ハ舞臺の上の小說とも云ふべし去れバ演劇を以て敎導を主

とするものとせんとハ夢にも思ひ寄らずたゞ人を樂しませるのうちに多少の効益あらせあハ其れ相當の効益ならんと思へりよしたとひ此効益あらざるとも若し弊害なくして人を樂しませ得なハ既に過半ハ其目的を達したるものと云ふべし然るに我國現今の演劇ハ下等の樂を人に得させて然も弊害甚だ多しと云ハゞこれを改良するの切要なるハ亦た辨を待たざるべし

此故に數年前來すでに演劇改良の論を爲すものありたれども當時々勢の未だ至らざるより左程の勢力もあらざりしが近來事々につけて改良論の盛んあるより遂に此事をも早く實行せんとの企漸く熟し演劇改良會と云へるもの創立さるゝに至れり其發起人中にハ井上馨伯森有禮君あど申す高貴の人もあれど久しく倫敦に留學ありたる末松謙澄君を初めとし歐米の文化を身にし玉ふ方々の主に多く盡力さるゝときけバ今回の發起ハすでに半バ成れるやうの心地あり又新聞雜誌等ハ一齊に其擧を賛成し各自思ふまゝの意見を列ねて改良の法案を立てたり吾人も亦た多少の思案ありと雖も之を一々此紙上に掲ぐるハ女學の外に出でゝ蛇に足を添るの譏あらんと考へたり然れど日本の演劇ハ特に女に關係あるものなれバ其關係する限りに於て思ふ所を述るハ決して不可あらじと思ひ日本婦人教導の一方よりして現今演劇の改良を要望する條々を左に論述すべし

●

○男女交際論

左の一篇は心友某より贈り玉へるものなり其説ハ男女交際論盛んなる當今に於て大切の敎とあるべく且つ吾人の深く同意するものなれバ玆に掲げて社説となす

昔し吾國の風俗を考うるに男女の區別今日のごとく甚しからす殊に宮中などにてハ男女親しく相近きて物事に與かりしこと少からずたとへば黒主と小町か相對して詠歌の優劣を爭へるあんどの事實を思ふにつけ當時の有樣如何にありけん座ろに懷かしき心地せらるゝなり左て其影響にや女流の中にも俊秀多く輩出し後世にまで重んぜらるゝ史書どもを著はせしものも見えたり然れども男子に其の撙節を保つの德義少く女子に儼かある貞潔の精神乏しきものから風流優美なりし當時の習俗ハ次第に淫奔猥褻の媒となり男子も之が爲に大いある害を蒙ぶり女子も之がため又吾が地位を保ち難きに至りしぞ是非も無き次第なれ古への才女佳人等が詠ぜし歌作りし書物語

其他月卿雲客の心術及び其の毎に事とする所を觀れば終に斯の如く成り行けるも理ありと謂ふべきのみ東洋の男女相隔たる風習は男女七才にして席を同ふせずと謂ひ或ひハ女人ハ殊に罪深しなどと敎ふる道の行れるゝにも由りまた其外にも多くの原因あるへきことならんが第一に男女交際の弊社會に著しく現はれ其の風俗世敎を害することと明らかなるに驚き斯くては得成るまじとの憂慮より漸やく內外の取締嚴重に成り行き果てハ武家の盛んなりしころの風俗とばなれるならん皇統一系と誇れる朝廷の勢ひを失ひ武臣の權柄を占むるに至れるも幾分か此に原因するものあるへし西人が腐敗ハ小弱の母なりと言ふも敢て誣言にハあらざるなり

之を要するに吾國是までの風敎道德の程度にてハ迚も男女交際の親密なるより生ずる諸の害惡を防止すること能ハさるなり獨り日本のみならず凡そ風敎の善良ならざる國に限りて男女の差別極めて極めて嚴重なり支那天竺の若き是れ也此等の邦國に於て男女の交際を嚴重にせざる時は風俗漸くに衰ふるなるべし蓋し文明の澤を蒙ふり開化の快樂を全ふせんと欲せハ必らす眞正の道德を立てざるべからず男女交際の美ハ君子にして始めて之を樂しむことを得べし察せざる可けんや然れど眞正の道德ハ眞正の宗敎を以てせざれば決して堅固なることと能はざるものあるが故に目下吾邦女敎の最大急務ハ眞正の宗敎を天下に普及するに在りと謂ハざるべからずフランスの若きハ宗敎の勢力稍衰へ德義の風化弛癈するの徵候あり之が為に左しもに形躰上の開化に誇り政令法度の進步を極め富强字內に冠たるの地位に立ちながら男女の交際次第に腐敗し女子の地位漸やく卑く離婚日に其の數を增し淸潔なる婚配の道或ひハ地を掃ふに至らんとす視るべし世人の所謂開化文明ハ男女の交際を全うせしむるものに非ざるなり

近頃世上の論者が頻りに男女交際の說を唱ふるハ實に左ることとなれど此の交際に由りて十分に美果を收め歐米諸國の如き幸福を獲んと欲するにハ吾が國の風敎果して其の程度にあるか吾が國民の德義能く其の諸の害惡を防止するに足るか余輩此點に至りて大いに憂慮に堪へざるものあり論者が徒らに花果の美を稱して之を養成するの根幹を看過するハ遺憾に堪へざる所なり嗚呼日本の父兄よ汝が子女ハ今日の道德を以て能く歐米人の如く男女の交際を自由に為すことを得るや今日の風敎を進めて男女の交際を安全の地に置くに如何なる良法ありや神か佛か將た刑名法術西洋禮式の類か是れ余輩が日本の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

父兄に問はんと欲する所なり鹿谷堂主人時論に感ずる所ありて記しおはんぬ

●叢話

○女のふみ（上）

一筆しめし上まゐらせ此の候はまことの候に御座なく候つぎにしたゝめ候がまことの候に御座候とはむかし女のふみをろしりたるある男のわるくちありおぺて女のあたゝめたるはくだくだしきと最と多く前に述べたるを末に言ひ重ぬるなど譏むにわづらいしと思ふ様なるを常とすれども是れ必竟女の眞心をうつしたるあり今ま女どものわたり物語るに其言遣ひ大抵はみなかゝるものとおぼゆ然らば其眞をうつすを文の道とする上より云へば候のかね〴〵も言まはしのくだ〳〵しきもあながちには咎むべきにあらず此頃物知り顔する女子たちの認むるやうに妾不肖と雖も豈それ然らんや眞人幸に賢慮を惱ます勿れあどあらんよりは遙かにまされるやう思はるゝよしあるなり

但し吾人は必しも候のかさね文を最上とするにはあらず其書ざまのよく眞心に似合ひ言葉ぶりに近きを以て宜しとは云ありすべて事務上商賣上などの手紙あらざる限りは可成く心のまゝをうつしてまのあたりかたり合ふ様に認むべし是れ文の道にもかなひ女の眞心をもうつし得る心得ならむされば西洋にて情愛の文と云ふは大抵人にはをろかしと見ゆることまでそこはかとなくかきつゞけて眞心をあらはすを常とせりチレンヂのウイリアムが其主人ペンチンックに遣りたる手紙は今の世に多く殘りて情愛の文の手本としもてはやさるゝとあるがそのかき様を見るに當時自ら爲し試みたる仕事はもとより心のうちの思ひなど皆なこと〴〵くしるしつゞけ庭の植木はやう〳〵さかえ候瓜はかれて惜しくも落ち散りぬ廐の馬は此頃かく〳〵に候細君の爲に旅の馬を用意したく存じ候眷族の一人はある富家の娘を云々したるのち婚姻の儀を否み申候ことまことに心うく覺うるなど其外船に醉ふくるしさ咳をうれふるさま頭痛のなやみなど一々かゝげたるのちつねに神の御助により安穩なるは尤も感謝すべき極みに候などかきつゞけたる様當時嚴正愼密と云はれたる政事家の文にはあらじと思はるゝほどに女々しき瑣事多きと也。されば夫より妻に送り妻より夫に送る文などは尚更に心中の微をうつし出すこと多しとすこれを以て一度のおとづれに四五十頁の紙を用ゆる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

とまゝあるよしにて彼のガスターブドールが其最愛する老婦人よ送りたるは當時スヰッルランドを旅行するやどりよりとハわれど一回に八十頁を用ひたりとの事有名なる談しあり然るにわが國の風ハ兎角にかたくるしき支那の樣を手本とし平生眞心を打あかして胸臆をかたり合ふ友人にも手帋とあらバいとかたくるしき文躰を用ひて一筆呈上より恐惶謹言に至るまで若し面り打ちかたらハんには夢にもかゝる言葉遣ひあらじと思ハるゝものゝみあり甚しきは漢文を用ひ然らざるも成るべく短かきをよしとし彼の西洋にて尊む所のさまとは全く反對のつゝしみをバ文の道と心得ること從來のならはせありされバ夫より妻に送る文の如きハさらにも言ハず愛情もゆるほどの妻より夫に送らんにもなるべく言葉をつゝしみ心を平らかにしてすら〳〵と物淸よげに書きつゞけたるをのみ尊むさまとあり　けさの御つかれ波の上の御かへり路御やかたの御しゆびいかゞ御あんじ申しわすれねバこそ思ひ出さず候かしくなどさかしらに言ひまハしたるをバ上乘とせり之を西洋にていもせの文の手本とするかの

かく御別れ申候へバ二人相思の愛念ハ最としバ〳〵とは更らに言ハず絶えず思の道にて相遇ふとと存じ候そあたが余を思ひ玉ふハ余がそあたを思ふにまさりをとりのありとハ思ハず御別れ申すそのうきつらさもまた一樣とハ思ひ作ら此のつらき思ひを得忍ぶとハそあたや劣り玉ハんと心配いたし候これそあたの忍耐の足らぬとにハ候ハず心よみたせ玉ふ愛の力のいや強からんと思ふゆえに候

などある者に（此は學士タッソの父が其令閨に送りたるものときゝぬ）比ぶるときは其模樣暖室に入ると氷室に入るとの相違あるやう思ハるゝとなり（未完）

○女學隨筆をみあへし　（四）

○姫の名稱　いにしへ公卿あどのむすめたちのついでをいふに一の姉あるを姫君とも大君ともいひ二を中の君といひ三より下ハつぎ〳〵に三の君四の君あどいへり二人にてもいくたりにても二あるをバ中の君といひわきて姫君とハ一なるをぞいひける物語なぞにいへるやうみなかくの如し新猿樂記と云ふふみにも右衞門の督ある人の十六人の女のことをいへるよ大君中の君三の君四の君の御許五の君六の君七の君御許などいへり此書ハ藤原の明衡作れりそのころまでにかくぞいへりと見ゆ（玉勝間萩の下葉の卷）

○小町の話　篁の二男出羽守良眞の女小野小町少して色盛あ

りしときもてあされし有様ならびなりりしかば衣に錦繡をかさね食には海陸の珍を調へ身よりは蘭麝を薫し口よりは和歌を詠じよろづの男を賤くのみ思ひ女御后に心を懸たりしに十七にて母におくれ十九にて父におくれ廿一にて兄に別れ廿三にて弟を失ひしかば單孤無賴の獨身に成ていみじき榮花日々におとろへて花やかなる形年々にすたれつゝ心がけたるたくひもうとくのみなりしかば家はやぶれて月の光むなしくすみ庭はあれて蓬のみしげり物事かはりける比ろ文屋康秀が三河掾にて下りけるに誘はれて　わびぬれば身を浮草の根をたえてさそふ水あらばいなんとぞおもふとよみて次第〳〵に落ぶれ終には野山にぞさすらへける懷舊の心の中にくやしきこと多かりけんかく詠歌の中に思ひつゝのうたは業平を戀ひてよめり色みえての歌は大江の維章が妻とありしがやがて藤原の朝行が妻にありけるをうらみてよめるものなり（理齋隨筆）

○箱入娘解　今も俗間に深窓にやしなひかしづく娘を箱入娘といふは竹取物語に竹取の翁かくや姫を竹の中に得てうつくしきことかぎりなしいとをさなければ箱に入て養ふとあるにより云ひ初めたるか（古事談）

○西洋禮式　（第十一）

宴會(Parties)の事

○一朝の宴會（Morning Parites）と稱する者は近代の工夫に係るものなり概して五六七の三ヶ月に於て催すよ大抵午后二時に始まり同じく五時に終はる饗應は重もに談話音樂及び（若し庭あらば）クロッケー、球投げ、弓術等より成立つものとす男女とも必らず美麗なる朝衣を着し一般の禮法を辨まへ且つ時事の問題と上に述べたる諸遊戲に通ぜざる可らず

○二夜の宴會（Evening Parties）は大抵午后九時よ始まり夜半又は一層をそくに終はる此に臨む者は必しも會の始より臨み終りまで止るに及ばず都合よき時間に出入するも差支なく一夜の内に二三軒に臨席するも勝手たりとす

○三宴會の室ゐ入るときは其内に居合はす友人に會釋する前に先づ其家の主婦に面會し禮辭を述ぶべし盛大なる宴會にては主婦たる者は通常戸の側に居るものなり然れども大勢の來客の爲に主婦と我の間だかけ離れたるときは我手近に居る友人にまづ會釋することも又た群集を押分け主婦の許に至らんとする途中に於て出逢ふ所の朋友知己に會釋するは勝手たるべし

○四宴會の席に於て會釋するは唯だわが朋友知己に限るべし滿

座の人々へは當時の禮法として挨拶するとなし

○五音樂に通ずるもの若し主婦より一曲を所望さるゝときは直ぐに其望に應ずべし幾度も強ひ請はるゝまで待つ勿れ然れどもそれを望むの權利は唯だ其家の妻に在ることを記臆せよ若し他の人々より望まるゝとならば程よく辭退し主婦より望まるゝ迄は諾ふ勿れ

○六外の客が音樂を奏し若くは唱歌する間は沈默になし音聲を發する勿れ

○七若し音樂を奏せば餘り長く時を費さぬ樣注意すべし一小曲の二節又は歌本の四頁にて充分慰みとなるべし就中容易に且つ精密に爲し能はざる事は決して試む可らず

○八大勢取組の遊戯を臨時に行ふとき其仲間入を望まるゝときは辭退する勿れ

○家政心覺

敷物のインキを取る法

敷物にインキのつきたる時は成丈け海綿にて拭ひ取りしのち少し許りの水をそゝぎ幾回となく拭ひ取りしのち少許の蓚酸又は鹽又は酸模を以て摩擦しのち再び水にて洗ひ安謨尼亞水を以て温め拭ひ置けば清淨に取去ること妙なり

卵の見分け方

惡疫流行の際鷄卵を用ゆるもの多きとなるが其の良否を見分るとは甚だかたし卵屋は之を日に對ひて窺ひ見るなれ共其外たしかなる心得方一つ二つあり抑も卵は時日を經るに從ひ其水分蒸發するものなれば次第に重量を減じて一方に存する空隙を增し其腐敗いよ〳〵甚だしければ其すきま彌よ增し之を水中に投ずれば敢て直立するとなく忽ちに倒れ横たはるに至るこれ其腐敗せるとを知るの簡法なり又泰西の實驗家の說によれば鷄卵の色白き者は其茶色なるものに比すれば滋養分少なくして味もやゝ劣るものなりとぞ

(よせぶみ)　府下　本鄕中村ゆう

家内の經濟を修め日々の料理万端をつかさどるは女たるものゝ義務に候はん若しよく此等を己がつとめとして執り行はずんば外に出る良人をして全力を家外に盡さしむると能はず家政も整理する時なくして一家の興起する望あるまじと信ずよりて本誌上にかゝる心得方を多く出さるゝやうを希ふと共にわれら互ひに經驗したる事々を報じ合ひてかたみに敎えなば如何に益多からんと思ひ候まゝ讀者諸君にかたらひ奉る

右投書のうへ編者に對するの要望は謹んで承知仕候

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●論說

○女子の教育を論じ併て耶蘇教擴張の法を說く

（其三）

外山正一

此の論を聞きて宣教師輩の中には成る程余輩が專ら日本婦人の教育に從事したらば其の方の都合はよからむが自分たちはもと教育が主意にて來れる者に非ず耶蘇教を弘めるが趣意にて來れる者あり抔と云はんとせらるゝ如き者も定めて有ならむが。余輩の考へよてはかゝる說を爲す者は宣教の道を知らざる者と言はざるべからず、いかさまチヨツト聞くときハ宗旨を弘むる爲めに來れる者が教育の事に專ら從事しては肝腎の趣意に背くごとくに見ゆれども眞に耶蘇教を弘めむと思はゞ宣教師社會にて我が邦上等社會の婦人の教育を一と握りに握つてしまふにこしたる手段は有らざるあらむ。洗禮を受けて拙者は耶蘇宗で御座ると看板かける者の數の如きはイザ知らず眞實帰も耶蘇教に化せられたる者の數を增さむと思はゞ諸方をかけまはりてキヽメの淺き說教を爲し居らむよりは深切に教育を爲し乍ら耶蘇教人の品行に服さしめ耶蘇教人の深切に感ぜしめて教育の間、交際の間に次第次第に耶蘇教に歸依せしむるが萬々上策あらむ。耶蘇教を聞かするより事耶蘇教を見せしむべし。抑何れの邦を論ぜず其の宗旨を變へさせむと思はゞ先つ其の國の婦人を改宗せしむるに若くハ無からむ。婦人を生捕るは男子を生捕るよりはるかに易ければ男子を生捕ることを務めむよりは寧ろ婦人を生捕ることを務めざるべからず。而して一たび婦人を生捕りたる上は男子を生捕ることは亦易きのみ。最初西洋人が耶蘇教に歸依するに至りしも婦人の力によりしこと實に少なからざりしあり。且や母親の信仰する所の宗旨は其の子の信仰する所たらざるは稀あり。一たひ我が邦の婦人を耶蘇教に歸依せしめたらば其の子たる者ハ洗禮を受けしと受けざるとに係らず其の精神の如きは必ず耶蘇教の信仰者として成長せむこと決して疑ふべからざるあり。

人或は思はむ。我が邦の父兄には耶蘇教家の設たる學校に其の女子をおくるとを好まざる者多からむ殊に中等以上の者ハ大概皆な宗旨嫌ひあるが故に中等以上の者の女子にしてかゝる學校の生徒たらむ者は至つて少なからむと。この懸念たる一應は尤もの樣に聞ゆれども余輩の考へにてはかゝる懸念には決して及ばざるならむ。余輩の考へよてハ我が邦中等以上の者が宗旨嫌ひあるはかゝる學校の繁昌の爲めに不利なること

とにあらずして却ッて幸のことならむ。何となれば若し我が邦中等以上の人にして土耳其人の如くに某宗旨に深く凝り固まりたるものなむらには其れこそ耶穌教學校の繁昌なさむ望みは無かるべしと雖も我が邦の中以上の人は何宗にも凝り固まりたる人にあらずして何宗をもおしなべて嫌ふ如きものなるが故に土耳其人の如く既に固まりたる宗旨の有るものに比ぶれば却ッて始末が宜からむ。殊に我が邦人の宗旨を嫌ふは之を恐るゝ故に非ずして寧ろ之を輕蔑するによるが故に耶穌教でも回々教でも之と關係を付けむには我に大いなる實利益を得らるべしと信せむには何宗でも御坐れ之と忽ち睦じくせむとする如きものあればなり。而して今日世間の様子を見るに耶穌教を餌に使ひて我が邦に實利を得んと欲し爲に耶穌教に戀慕を仕懸けんとする如き者政府にも民間にも漸く起らむとするが如し。これ耶穌教の爲めには實に失ふ可からざるの時なり。この時に乘ずることを知らざる耶穌教人は自ら助くることを知らずして徒らに天の助けを受けむことを願ふ如き愚か物と言はざる可からず。　（未完）

此論の掲載餘り久しきに渉れども餘白なき故に次號にて終れることとすべし

○讀書の要を論ず

木村熊二

左の一篇ハ明治女學校の校長神學士木村君の寄贈に係る

語に云く庖丁牛を解きて養生を知り張旭劔を舞して書法を悟ると有識の士の其學術を得る卓然として衆人に異るあるが如し然れども其妙所に達する所以を問ふに精密に其技術を考究し非常なる經驗を積むあらざるハなし若し庖丁をして牛身諸部の結搆と之を解剖するの術とを熟知せざらしめバ何ぞ刀を奏すると騞然として其音節に中らんや張旭は思想を他技に移さず腦力を注ぐ所ろ專ら草書に在り故に其技を能くして終に後世に名あるに至れり

今や浮躁淺薄の士人の技能あるを見て公然人に語りて云く彼ハ智あり彼ハ才あり故に之を能くせり我をして彼の智彼の才を有せしめバ我も亦之を能くすべしと又云く彼ハ年尚ほ幼にして記臆に富む我をして彼の如く若からしめバ豈に彼に一歩を讓らんやと嗚呼其れ何ぞ思ハざるの甚しきや天下の人豈に才智に富めるものあらんや其才智皆な不完全なり故を以て造化り奇功精妙を探知して以て我が知識を養成せんと欲するなり其孜々として思索するに當りてや目は是にあらざれバ見ることを欲せす耳ハ是に非されバ聞くことを欲せず口ハ是に非され

ば言ふことを欲せず心は是に非ざれば慮ることを欲せず意を用る此の如く周密にして而して後始めて己の企望する所の學問、技藝も其妙處に達することを幾ふべきなり

ニートンノ引力に於けるワットの蒸氣に於けるフランクリンの電氣に於けるや其發明する所のこと深思熟考の結果にあらざるものなし今や少年輩にして我れ智あらず我れ才あらずとて自ら愚不肖の地位に甘んじて之を救ふの方法を講ずる能はざるは是れ自ら棄るなり假令ひニートンの智あらしむるも恐くは之を活用する能はざるなり

世人或は言はん人の學問するや常に戶を閉ぢて万卷を讀破し然る後に爲すある可しと是れ大に誤りたる說と言ふべし書を讀む何ぞ必しも多きを要せんや要するに精細に之を熟讀し之を翫味するにあり知らずやボンヨンは一卷のバイブルを熟讀して有名なる文章家となり又宋の趙普は論語一卷を讀みて大祖太宗を助け天下を定めたる例あるをされば一卷の書を讀む人の巧拙によりて其結果の得失を見るに足るべし今や庸人豎子が書を讀めば必ず万卷を期す然れども其事實を探究し之を實際に用ゆるとに至りては宜然として之を五里の霧中に置きて問はず恰も新聞紙の雜報を讀む人の如く一覽看過し去りて後は雲烟の眼を過ぎ百鳥の耳に感する思を爲すのみにして其に付て毫毛の益利を腦底に收拾すること能はず又慨歎すべきにあらずや

故に或は終身書冊の奴隷となり或は蠹魚と群を爲して之を使用し自己の知識を補成するの方法を察せず遂に腐儒の譏を免れざるに至るあり夫れ書冊は蒙を啓き智を進むる道具にして智識を實際に練磨し技藝を實地に研究せんと欲する人に裨益するも之を感化し人を改良するが如き勢力を有するものにはあらざるあり假令ば我輩が望遠鏡或は顯微鏡を用ひて視力の及ばざる物躰を驗查し常に想像外の奇異を發見するが如く我輩は書冊を開きて古人の經驗と論說とを見我が想像外に貴重なる眞理と理論のあることを知り得るあり顯微鏡ありと雖ども我視力の甚だ鈍くして物を明瞭に視察し能はざれば十分に其利益を與ふる能はさるなり書冊の用たるや又然り我缺漏を充實し錯誤を更正し不足を補成するに有用ある器械あれども智覺の本初たる活動經驗推究感覺敢爲を度外に置きて其にのみ拘泥し我智識を練磨せんと欲するは恰も古人の言ふ如く不毛ある磽地を照らず日光と又之に濺ぐ雨露の如きものあり如何に有益ある書冊も決して我を裨益する能はさるあり（未完）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

佳傳

○貞女夫の眼病をいやせし事

西川何がしといふ浪人眼をわづらひてさまぐ\とつくろひけれどもさらにしるしもなかりければ其妻よき眼藥を求んとて爰かしこありきつゝ吾すこやかなる眼を淸盲と僞りこゝろみけるに何れも眞僞を見わくる眼療もなかりけり然るに本所一つ目の何がしとやらん眼醫師(其名は忘れたり)此女の眼をみて是淸盲にあらずわざやうあり何とて我をあざむくならんと大きにいかりければしかぐ\のよしかたりて罪を謝し夫の眼病を療治しけるにほどなくさはやぎけるとなん此女智惠ふかく殊に貞節のこゝろありけるよし瓦礫雜考に見ゆ

○貝原篤信の妻

羽佐間村佐用氏の醫師語て云く筑前の儒者貝原篤信は其始め福井の町續き荒津と云所の生れにて二十才計迄は常に川獵など好みて何を一つ辨るともなかりしが其妻は儒者の女にて有しが篤信に向ひ申けるは人間は人間の道といふ者ありそこの如く晝夜空しく打暮して人道を知らざるとは人間の法ならずといさめしとき篤信此詞を聞て左ほどいはゞその人間の道に入るとはいかなる事をするぞと問し時妻は學問を以て至るとと云さらば夫を敎へよといひし時妻始て大學を以て素讀なさしめたり篤信忽發明して斯て居所にあらず京都に登り年を積み學問の地を極むべしとて在京すると四拾年餘りにて終に天下に名を立筑前の大守よりも三百石を與へて儒學を業とせしむ始め久兵衛といひ後に篤信と云剰昔の太宰府の學校の舊號學業院の名を許されて學業院篤信と云へりと事跡合考に見ゆ

○松山天姥が母

松山天姥は生れて才あり幼きより安志侯に仕へたり侯弱かりし時學士に禮あつくして頗る儒雅をたうとび書法も又た當時に傑出せりされば かねて天姥の書才あるを愛したまひて或時天姥にのたまふやう汝に書法を敎ゆべし自ら勤め學べよとありければ是より天姥孜々として業も進み世にもやうぐ\知らるる程になりしが壯年にて父を失ひ母の養ひに生育せり母ある時かたはらより天姥が怠りがちに見へたりければ一の古かはでを提さげ來り之を傾むくるに反古うづだかきをなせり皆なこれ天姥幼きより習ひ書きける所の草紙なりその紙はしに盡く年月を記し措けりさて指をかゞめて其時をかぞへこれ汝幾歳の時かきけるもの即ち此の如し幾歳なるはしかぐ\なり吾つねによろこべるは他日かの公讜士甫(當時の書家)が輩に後

るゝことをせんと思ひたりしが今にして始めの勉強に比さバ大に進まざるに似たり始より吾が駑馬の鞭うたれて後にやうやうに歩を進るが如きを願ハんや汝なんぞ勉めざるやとて彼の草紙をいだきてさめ〴〵となく天姥大に悔ひ是より彌よ益す力めて怠らず寝食を忘るゝに至り心目を古法帖にきハめしかバ終にハ書を求るもの多なり世に其名を知らざるものなきに至りしとぞ名家畧傳に見ゆ

○梅香女史の傳

第十五　留る所を定む賢母の愛　行く所を決す秀女の才

夕立殘りのふ晴れて軒端のしづく數ふる如く庭の木の葉色增りて人もいき〴〵とみる夏の木の葉すぐるころやう〴〵五十と見ゆるほどの老女暫らく庭面をながめわりしが傍らなる二十あまりの乙女を見かへりて靜かに云へるやう

先達てからきゝませうと思つて居ましたがお前も多くの方の御世話でやう〴〵今度卒業もし並一と通りの學文は恐くお習ひでハあらうが此から先が大事ジヤゆえお前の心得方をゆるりと聞たい何如思つてお出ジヤネへ

ハイその事は私よりも申上げ母さまに御相談いたしましたうへ御許をうけたいと思つて居ましたが此の四五日ハ少し御不快の様子に見受ましたゆえ只今まで扣て居ましたが御氣分は何如がで御座いますか

アイもうさつぱり宜しひよお前もかねて言ふ通り父様は御行衛知れず御生死の程も定かならねバ女なりとも青山家の相續人なり並々に超えて勉強しなければならぬとジヤが叔父許の信切に對しても決してをろそかに日を送るとは出來ませんのか。お前もよく此等を考へて此迄ハ人にかうと云れるゝこともなく先づ立派に卒業をしたので母も心でハ喜んで居ますがお前の御連でも卒業をなすつた後は丸で人が變れるやうに御成なさるのが多い様ですからよく〴〵覺悟して此から大事に勉強しなければなりますまい

ハイ母様の仰しやる通り卒業までは言ハゞ御膝元で何やかやの御教をうくるやうの者で御座いませうから落度がちの私等も日々に心得方をおぼえますれど最早學校を出ましてハ人もソウ子供のやうニ申してもくれませず自分も最早安心しまして落度を改るとも考へませず大抵は全くかハりて先生方の御教甲斐もない様になると申しますから私も此からこそ母様の御教を何事につけ承ハりまして一層學文をはげみ切ては學びましたもの丈でも實用になるやう致したい

と存じます
ソウデスともよく其心を失はんやう常々はげまなければなりませんよソレにしても私はまだ老ひ朽ちたる身と云ふではなし五十の坂をこゆれば最早隱居するものゝやうに心得た昔とは違ひますから何仕事をしてお前の學文の助けに仕度と此間からだん〲考へました實は去年から丸一年こんなに厄介に計りなつて居る氣は毛頭なかつたが何分病氣上りの疲勞で心に思ふやうにも出來ず叔父が心配していろ〲と信切にしてくれるからツイ今日までなりました然しお前もそれ程に志を立てゝ居るものを母が一人無事に居るとは出來ませんから丶丶丶

イエ母樣どうぞそんな御心配はなさいますな是からは私が御恩の報ひをもなし少かでも御心を休めたいと思ひますから決して御苦勞になさりますな

イエ〱お前は此からが大事の時ですからそんなことに心をこめて心配するのはまだ早う御坐いませう幸ひ御殿さまよも此頃御上京あそばしれ奥の女中衆をとりしまる御役が御入用とのことゆゑ叔父に話して御願ひ申させみんと五六年は御殿のおつとめをする積りにきめましたからお前も心をきなく覺悟して

と云ひかけ突然ふところの紙とり出して鼻をかみ

安心して勉强をお爲よ父樣が居つしたらお前も掛念なく學文が出來やうが、、、ホンニあの築地の何とか仰しやるそれあの西洋の御方はさぞ今度のお前の卒業を喜んで下すつたでせうね。エ、梅

ハイ大層喜んで下さいましたし又いろ〱と御信切に御教をくださいました。が。母樣その御心持はモー叔父樣に御話なさりましたのですか

ア、少しは話しもしたし御殿の御樣子もきいたがそれはそれとしてお前は是からどう云ふ樣に爲たいと思ひますか母、はこのやうに覺悟して居ますから母のことは掛念なく望みの通りを言ふて御覽。エ、梅

梅はたちまち眼を赤くして母の顏を見つめたるが母樣はすでに自分の志を御察しなされ後々のことを思はせじとかゝる御決心をなされしやと思へば心中たゞ悲しく有難しと思へば言葉も出でずハイとばかりにうなだれぬ

○正誤○前二號は校合ことに粗漏にて誤多く厚意に反けること甚し三十壹號本傳最後のたえ〲の歌左の方は衍につき削るべし。卅二號三三頁の末行渡邊とあるは澤山の誤。

●ナイチンゲールの傳は餘白なきに付次號に讓る

●寄書

○早起感ずる所ありて　　秋華

朝もよひきりたちこむる山の端のこぬれよさわぐむら雀かな

○本鄕教會晩餐のをり感ずる所ありて　　ゆりか

みち分わぶる、あつくさの。ことわざしげき、おほのはら。
重荷を負ひて、たび〱との。おぼつかなくも、たどりゆく」
落れば消ゆる、しらつゆを。いのちとたのむ、うつせみの。
むなしき骸に、あるまでも。つみのちまたに、さまよへり」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

吾よのさまの、はかなきを。　あはれみたまふ、あまつかみ。
一人の御子を、おしみなく。　あたへたまふぞ、めぐみなる」
淸きみたまの、たすけにて。　こゝろのくもも、はれわたり。
救ひのぬしの、めぐめをバ。　けふしもみるぞ、うれしけれ」

○板谷なみ子の傳（産婆）　岡村たかえ子

世にあらバおなしまなひのかゞみともなりてひろめん玉鉾の道さきがけにしをりしてかぐはしき名やのこすらん無をかこちてしのばるゝハ我師原八重子のいとしたしかりける友なりし板谷濤子ぬしにこそなみ子ハ東京府下南多摩郡關戸村井上季佐氏の二女にしてまたいとけなき旹より板谷氏にかし其夫某に何くれとなく敎をうけてひとゝなりしにその心いふにやさしく萬のまなびにさとくて山口しるく見えけるとなん抑明治の大御代のめぐみあまねく民草の二葉の生立まもれよといともかしこきみことのりありて都もひなもおしなへて神代のまゝに豐あし原のかぎりなきさかえをわふく御代なりき都の愛宕下共立病院といへるハさきに東京府病院となんいへりけるか其比かたへに産婆學校といふものを立させ山崎元脩氏橋爪助信氏のふたりに命じて多くの産婆を敎育せさせ給ひぬ濤子も其むれにありて業を修むるれか中にもまなべるみちのすぐれしとほまれハ匂ふおほ空の月のかつらも折えしそなはれにもはえある事成けりさる程に月に雲花にあらしの障りとハ誰がいひ初し事ならんなみ子ハ只かり初に打ふしもいつしか肺病とやらんくるしきまでにそおもりにし始ハ醫藥のちからもてつなきとめたる玉のをの絶るにちかくおほえけん付添ゐたる母にむかひ幾年月たらちねの身をいつくしみ給ひける其みめぐみの海山をいさゝかむくひ奉らて病の爲とハいひながら先立はへるもはかりがたしのこりをしき事成かしさりながら去年の夏夫のいたつきにをかされ給ひ其折むなしう成給ハゝまな子の長生いかならんつまにくらべて無跡のなけきハとゝまり給ハれかしといろハを慰めいさめつゝことハりせめてとにかくに語るすさみの言の葉ハおのつからなる名殘かと聞ゐる母ハやる方なく思の露のおく袖につゝみて猶もまめやかにまたうらわかき身にしあれハやかて心ちもよからんものをわびしき事ゐいひ出そと聞ふし毎に打けしぬかたへにありし夫某もつくづくともり聞まゝに心の裡やおし斗りけん遺言の葉もわりぬやといとねもころに問けるに他の事ハえいはで只わがおさなきよりひとゝなし給ハりしみめぐみハひとかたならずとにさいつ比かしてさまぐ\みこゝろ盡させいたわ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

り給へとこたひのいたつきいゆへうもおもほえす死なバふわけといふ事して醫學をみかける人〻のまなひの一はしともなしたひてんや夫のみいまハのねがひにはへりぬといひてけれハなにがしもとみにうけひきて我としころ教みちびきしかひこそあれといふがまに〳〵はからひえさせしにこよなくよろこびていく程もなく廿四年を一期としてまなこふたりをのこして終にむなしうなりぬとかや有し世に逢みし事ハあらねど折にふれたる師のものかたりに多わりける友の中にも我甲なるゆるし文をもゆつりちからを合せて此業をひろむるハ此人なりしにまたわかうして先立ぬるこそいとほいなき事なりしと取かはし置ける寫眞を見せ給ひてけれハなつかしさもいや増りて

　見るにいとゝ志らぬむかしも志のはれて
　形見にのこるひとのおもかけ

なやみて床にふしなからいまハにのこす言の葉のけちめみたさぬ正しさハやまとこゝろのうこき無みさほこけりさゝれいしのいはほとならん世の末まて消ものこる名にはちぬひとハかくこそあらまほしけれ

右板谷なみ子ハいまより八九年前東京府病院にわりしとき

我師と共に技術のほまれにて其ころの諸新聞に見えたれバ中にハ御覽えの人もわらんか

●寄書●　渡邊鼎氏より東髪圖解。淡路洲本の中津氏より英詩。信濃横森卷太郎氏の諸材料。同上の詩。下野小俣那須ます子の世の紳士に望む。淡路洲本成田賢雄氏の女子教育策和崎義路氏の婦人の服裝等。右何れも正に落手いたし候

木村とう子永眠

明治女學校の取締木村とう子（木村熊二君の令閨にして田口卯吉君の令姉）は去る十八日午前十時四十分流行の悪疫に罹りて永眠ありたり同子は父母に對しての孝女、夫君に對しての貞女、令息に對しての賢母なる上に日本婦人の教導に關して未だ此を見ざる程の熱心なる有爲温厚の方なりしに忽ちにして此不幸を見ると痛惜の至にたえず余は子としての教化を受ると茲に五年自ら奮つて女學の擴張に從事するも其助により從事し得るも亦た其助によれり今忽ちにして此不幸を見ると慟哭の極に堪へざる也他日精密の傳紀をつゞりて之を誌上の姉妹に報せんと欲す

●新報

○姦淫　姦淫とは天の定めにより夫婦となれる者が他の男女に通ずるか又は未だ夫婦とならざる者が相野合する類を云ふとにて道徳上甚だ惡むべき罪なり我國從來の敎に於ても固より之を責めて遺す所なしと雖も歐米文明國の之を責る太甚だ嚴正なるに及ぶ可らず故に吾國に於ては上流の紳士と稱さるゝものにして尙ほ妾を蓄ふるものあり閨房治まらざるの惡臭世よあがるゝものあり人も之を聽てあやしとせず甚しきハ世の新聞紙上に公然之を報し尙甚しきハいと風流氣に之をつゝりて遊野郎の歡心を買はんとするものあるよ至れると實に慷慨の極と云ふべし宗敎多年盛んなりし英國に於て倫敦の中心に密賣淫の惡風ありしとは尤も驚くべしと雖も人民の良心之をきゝ知るや否や全國大呼して乍ちに之を消滅芟除したると尙ほ羨むべき所ありと云ふべし此頃ろチャーレスヂルク氏かクローフホルド夫人と姦淫の嫌疑あるよしにて度々審判の上之遂に有罪と決せられたるとたとひ今日には未だ其實否を確認する能はざるとも全國人民が之を怒りて遂にヂルク氏を佛國の南部に永住せしむるやう決心せしめたるは確實なり嗚呼かゝる醜事の起生するハ尙不可なるところ固より之れあらんと雖も日本の主府東京府下にかゝる事件千百あるも尙ほ怒るものなく愧るものなきに比するときは果して何如ん吾人は日本男女間の道徳の一日も早く歐米の如くならんとを切望して止まざるもの也

○女學雜誌の評判　去る二十日の時事新報に云く本鄕弓町一丁目女學雜誌社より發行せる女學雜誌は既に三十號に至りたるが社說、叢話、論說、批評、佳傳、寄書、等の諸欄を設け何れも女子の心得となるべき記事論說を揭げ絕へて小新聞紙流の鄙猥なる習氣なければ良家の子女に讀ましむるも差支なしとの評判なりとあり(其下につゞけて云く。又京橋區南鍋町二丁目の績文社より發行する女學叢誌もこの程より記事を改良し春のや主人の稿なる小話を載せたるが子女の模範を示す雜誌の中に餘り人情を穿ちたる話などを記するは如何のものにやと)○又た去月十七日の東京獨立新聞には Jogaku Zasshi, "Ladies' Magazine," Wholesome in tone and an ardent advocate of the Higher cducation of women. The editor ,Mr. Iwamoto Yoshiharu is a student of theology and a facile writer. 又地方の諸新聞にても種々評判を辱ふしたれども畧す吾人ハ益す奮勵して敢て此評語に當り自己の義務を盡さんことを希

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

望するもの也

○共立女子職業學校　を設立の爲め趣旨書を配られたる趣本誌の第廿二號に掲げたるとなるが今度いよ〳〵準備相調ひ來月初日より開校さるゝよし廣告ゑ見ゆる如し今ま其の規則摘要を左にかゝげて令孃貴婦の入校を促し女子職業の追々に隆盛とならんとを望む

一　當校ハ女子に適應する技藝職業並に必需の學科を授くる所とす

一　教科は甲乙の二科に分ち甲科は裁縫、編物、刺繡、造花押繪、組絲、圖書等の諸術とし乙科は裁縫、編物、刺繡、造花、押繪、組絲、紙細工、藁細工、玩具、洗濯等の諸術とし甲乙科とも其中一二を修めしむ

但乙科の生徒にして望の者には食物の調理衣服の洗濯兒童の養育病人の取扱等良家の婢女たらんとするに必需なる事項を授くることあるべし

一　甲科を修むるものハ必讀書、習字、算術、家事、理科の五學科を修めしめ又英語を隨意に兼修せしむ乙科を修むるものにハ讀書、習字、算術の三學科を兼修せしむ

一　修業年限ハ甲科三ケ年乙科半年或ハ一ケ年とす

一　甲科を修めんとするものハ尋常小學科を卒りたる者若くハ之に等しき學力を有するものたるべし乙科を修めんとするものハ年齢十五年以上にして畧讀み書きを爲し得るものたるべし

一　授業時間ハ毎日八時間即毎週四十八時間とす

一　甲乙兩科の術科課程及學科課程表左の如し(下畧)

○看護婦　各避病院の患者ハ尙減少する模樣もなければ當今合して四十餘名の看護婦あるうえに尙多く募集さるゝときくに此に應すれば命を賣りて錢を貰ふとの惡評をうくる由にて敢て申出るものも少しとかきゝぬ前號來佳傳に述ぶるナイアンゲールを初としてすべて看病婦なるものハ尤も名譽ある女の仕事として歐米にてハ太く之を尊敬するとあるにかゝる惡説を流言するハ其人の心も見えて最と憫れむべし志あらん者ハ决してかゝるとに顧慮するとなく勇進し玉ふべく又た當今の看病學を學び玉ひたる貴婦人は先づ其例を示して數多の女子をはげまし玉はんとを希ふ

○女紅塲　西京には從前女紅塲あれども吾府下にハ未だ之あるをきかずひろかに憾みとしたるとなるが今度新吉原の貸座敷にてハ一同申合せ遊客なき時間を見計ひ娼妓等へ讀書並に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

裁縫等を教授せんとの說起り就てハ同廊内に女紅場を設置せんとて過日右の趣を其筋へ出願したりと云ふ

○婦人會　先頃より府下軍人方の夫人達が申合せ題名の如き會を設け折々集會して患者の取扱方などを相談せらるゝとあるが廣島にてハ鎮臺附軍醫の夫人は申すまでもなく其他同志の婦人の協議にて同じく婦人會を置き時〻繃帶の取扱方等を講究さるゝと云ふと去十五日の朝野新聞に見ゆ

○毛糸細工教授場　大坂青年會中の婦人等ハ先頃より四區一郡に各一ヶ所の毛糸細工教授場を設け靴下、手袋、小兒の筒袖頭巾其他樣々の細工を爲し居るが右五ヶ所とも西區川口在留米國人ギユリキ氏の夫人が順次に廻りて樣々の細工を教授すると云ふ(七月三十日内外新報)

○結婚法參照　元老院議官津田眞道氏ハ近來頻りに我邦鎌倉覇府の頃より徳川に至るまでの貴賤の間に行ハれたる結婚離婚の慣習法式を取調べ居らるゝ由なるが右ハ目下調査中なる結婚法參照に供する爲なるべしと云ふ

○保育講習所　大坂府堺幼稚園内にハ今度保育講習所と云ふを設置され保姆を養成せらるゝと云ふ(八月一日大坂日報)

○私立調理改良會　京都府下の料理營業者ハ一般團結して題號の如き會を起し營業上の氣脈を通じ會員一致親睦正實を旨とし專ら本業の隆昌を圖り調理を改良しま〱衛生の道を明にせんとする由東京府下にも先達てより食物改良の事大にかしましくありたれどもかゝる協會の未だあらざるハ一つの遺憾なり

○工女募集　京都府下愛宕郡田中村の府立撚糸場にてハ近頃追々事業の盛大に赴くを以て今度數個の器械を增置し一層事業を擴張するに付き撚糸工女十二歳以上の者若干名を不日募集するよし去十四日の内外新報に見ゆ

○寄附　大坂北區曾根崎新地津川席の藝娼妓四十餘名が申合せ毎月何錢づゝか醵金して同區消防頭取小林佐兵衛氏が設立したる大坂私立授産場に寄附せんと目下其出金高の相談最中なりと云ふ

○女工の製糸　過日時事新報の高橋義雄氏が上州に趣きて所々の製糸場を巡覽ありたる報告のうち女工に關する部分は特に有益なる事實あれバ延引ながら左に拔載す

富岡製糸場にてハ初め信州上州繭の達するや繭俵を切り開きて之を平たき長方形の箱に盛り之を庫中の架棚に藏し男工は繭の表皮のケバを取り若干斗づゝ量りて之を次房の女工に送

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

れば女工は其繭の上下を撰り分けて之を器械場の女工に渡す女工は器械を以て之を糸に挽き繼で之を大枠に繰り返へし斯くて糸質を撿し之を右捨り（右捨りは當製糸場に限る）に束ね更に之を一括とし十八括を一俵として之を横濱の同伸會社に送れバ同會社は之を佛國に直輸出するなり此他ノシと稱する屑糸を製する者もあり執業女工凡そ四百人、手工の工拙に因りて一等より七等に區別し廣濶なる一棟の器械場に整列して未熟なるものは自ら繭の端緒を求め繼で之を糸に挽き三等女工の邊に至れば三人つゝ共同して一人ハ糸の端緒を求め二人は之を糸に挽きやゝ分業法を用ゆ又女工五十人を一組とし毎組一人の監督女工ありて絶へず組中を巡廻し以て督促の任に當る、督促其法を得て糸の出來高他の組合に超過すればバ監督役の鼻目から高きの趣あればバ互に相競爭して毫も女工の怠慢を許さず事務奬勵の法其宜を得たりと申すべきなり繰糸器械場の外に蒸氣機關室あり繰糸器械に五馬力の力を供給す又水は最も製糸に大切なるを以て河流を製糸所内の小池に引き小池を距る數十間の處に鐵の大盤を備き小池の水の鐵盤に達するに當りて砂石を濾し去るの仕掛あり斯くて鐵盤の水は蒸氣機關室に入り湯と爲りて繰糸器械場に達す此外殺蛹房あり蒸殺房とて蒸氣を以て繭中の蛹を蒸殺する處にてハ四分時間毎に四石の繭を殺蛹するを得る由なり○製糸器械運轉の模様は頗る繁雜なるが故に今姑らく之を措き製糸所の景况の大略は前記の如し斯くて女工は器械の力を假りて專門の手工を施すが故に彼の座繰法にては一日僅かに四升内外の繭を挽くのみなれども器械繰にては一日平均繭一斗を挽き上等女工に至れバ一日一斗五升を挽くものあり即はち去る六月中は女工四百人の中病患者四十三人あり差引三百五十餘人の女工にて繭五百六十石を挽き絲百六十二貫を製したりと云ふ又此女工は各地の製糸場より見習生として遣はされたるもあり或ハ土人の女子もあり其數殆んど相半す從來ハ十五歳未滿にて入場したるもの五年、十五歳以上の者三年の年季なりしが斯くては女工が其手工の熟達するを期として辭し去るの趣あり製糸所の爲めに不便利なりとて今度十五歳未滿は七年、以上は五年の年季に定めたり女工入場中ハ構内の寄宿舍にあり飲食仕着の外に平均一圓五十錢の月給を取り上等女工に至れば四圓五十錢を取るものあり此月給の中より規則に由りて一割の積金を爲さしめ出場の際に之を下げ渡すこと爲し又夜間は夫〻の教育法を行ひ所長速水氏は時々女工一同を集めて婦女子の心得方を講談するを例となせりと云々

女子に必需の技藝職業等を授けん爲め來る九月より神田錦町（元大藏省銀行講習所跡）に共立女子職業學校を設け專門の敎師を聘て敎授す讀み書きを爲し得る女子にして入學望の者は來三十一日までに假事務所神田猿樂町三丁目一番地宮川保全方へ申出べし又規則書入用の向も郵送料として二錢郵便切手を添へ同所へ申出べし

明治十九年八月

共立女子職業學校

●本校前きに大に校舍を增築したるも猶未た來學貴女の望に應する能はず依て本年暑中休暇を機とし復た敎場寄宿舍を增築し來九月十日より更に寄宿生百名通學生五十名入學を許す寄宿生中其望に依り西洋室内の整理衣服飲食製裁賓客の待遇其外西洋風習の實務を修業せしむ但規則書御望の方は郵税二錢御遣しあるべし

麻布東鳥居坂町

東洋英和女學校

大日本官令日報

自八月廿五日每日發行全國無遞送料

本紙は官報に基き諸官令及諸則改廢兩文を掲け和漢洋學術上の雜報技藝緊要の諸件統計物價報告を蒐集す國民たるもの、日用欠く可らず就中諸官員戸長役場諸學校諸議員諸會社株主等に尤も必要の日報あり又左に記す非常の廉價にて發賣し上意の下達を本社の義務とし紙質印刷特に精撰し且つ迅速を專一とす

（定價）府内一枚一錢三厘。一ヶ月廿八錢
府外一枚二錢。一ヶ月四十五錢。三ヶ月一圓三十錢

發行所 東京芝區櫻川町八番地 **官令日報社**

中村敬宇先生序。井上直女史編纂

日本婦人纂論

郵税共定價二十六錢

本書は井上直女史が我國女權の振はざるを痛く歎き婦人改良に關する諸大家の論説を纂錄したるものにして苟くも愛國の志ある者は必ず一讀すべき良書あり

發賣所 東京銀座 **博聞本社**

英國理智先生原撰。日本渡邊修次郎譯補

大政事家 虞拉士斯頓立身傳 附。英國時事

石版書插入上等美本。全二冊上下兩編共各紙數二百餘頁
定價七十錢宛

近世朝鮮政鑑

全二冊○上冊定價三十錢

朝鮮李樹廷序。同朴齋絅述。同裴次山評。日本那珂通世訓點。

右二書發賣書肆
東京神田猿樂町三丁目一番地 中央堂
東京南鍋町二丁目三番地 十一堂

●女生徒募集廣告

當校ハ此迄敎場手狭にて衆多の來學貴孃を辭謝せしか來九月一日より九段坂下陸軍御用地内元統計學校にて授業いに付有志の貴孃八月三十日迄に御申込あれ
但し規則書御望の御方ハ御通知次第直ちに迴送すべし

麴町區飯田町壹丁目七番地

明治女學校

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

木村熊二妻とう儀去十八日午前十時四十分流行惡疫に罹り永眠致候に付來九月二日午后三時下谷徒士町三丁目基督教會堂に於て送葬式執行仕候上谷中墓地へ送葬致候に付此段荊妻生前の知己諸君に敬告す
八月二十一日
親戚 田口卯吉

和漢古今名家詩文 **圭玷新評** 第五十三集 八月廿日發 定價五錢

右ハ元來邦人ノ詩文ヲ刪評シタルモノヲ掲ケ來リシカ本集以下邦人ハ勿論文ハ韓柳歐蘇詩ハ李杜韓白等漢土ノ名家ト雖𪜈苟モ瑕瑾アルモノハ嚴正ヲ加ヘ大ニ詩文講究ノ便ヲ開カントス且集中ニ文藝雜話典故釋疑西洋英傑傳課題詩文等ノ諸篇ヲ設ケ頗ル修正ヲ加ヘタレハ益購讀アランコトヲ希望ス

發行所 東京神田區雉子町 **團々社**

基督教新聞 第百六十一號 八月十八日發兌 一部代價金三錢

○社説(リバイバルに先導者なきを憂ふる勿れ)○教報○雜錄(歐洲諸國宗教改革の顛末)(牧師教師の注意にまで)(茅屋一夕話)○雜報○英文教報○廣告

京橋區瀧山町六番地 **警醒社**

中外兵談 每月二回發行●一冊代價現金拾錢郵税一錢●十冊代價郵税共前金一圓●第二號八月廿三日發賣

●涙速艦ノ圖●將來ニ着目スベシ●甲鉄艦ト水雷艇トノ優劣●武功ハ文勳ト同視ス可ラズ●公使館附將校ノ資格及ビ其機密探知ヲ論ズ●佛國地中海艦隊實地演習記事●淸國事情芝罘ノ記●英國海軍本部ノ組織●支那ノ砲兵侮ル可ラズ●前哨軌範●淸佛談判始末●グラント將軍大勇美談●グラント將軍單騎重圍ヲ脱スル圖●軍中一夕話●淸國司令官ノ建議●支那兵備ノ狀况●此外雜話、官報、雜報數十件

東京本郷區弓町一丁目廿番地(女學雜誌社隣) 中外兵談社

定價

一冊。五錢 郵税。一錢 (但府內無郵税)
十冊。四十八錢 郵税。十錢 (同前)
廿冊。九十錢 郵税。廿錢 (同前)
卅冊。一圓卅錢 郵税。卅錢 (同前)

一ヶ月分女學雜誌代價	十五錢	府外ハ十八錢
二ヶ月分同	三十錢	府外ハ三十六錢
三ヶ月分同	四十五錢	府外ハ五十四錢
半年分同	八十八錢	府外ハ一圓六錢
一年分同	一圓六十錢	府外ハ一圓九十六錢

廣告

一行(廿八字詰)	一回	前金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引

但し不道德なる事物の廣告ハ謝絶す有益ある事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍ハ一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評す

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町(大賣捌) 巖々堂
東京神田區雉子町 團々社支店
同 神田區佐柄木町 東海堂
同 日本橋區新葭町 頁明堂
同 日本橋區馬喰町二丁目 自由堂
同 京橋區木挽町壹丁目 萬字堂
同 本郷區元富士町 盛春堂
同 本郷區春木町二丁目 解明堂
同 牛込區肴町 活神堂
大坂備後町四丁目 岡島支店
伊勢國松坂白粉町 家里初枝
東京芝西久保櫻川町(支局) 萬春堂

發行所 本局 東京本郷弓町壹丁目廿番地 **女學雜誌社**

持主兼編輯人 巖本善治
印刷人 森田豐

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

…於て…葬式執行仕候上谷中墓地へ送葬致候に付此段荊妻生前の知己諸君に敬告す

八月二十一日

親戚 田口卯吉

和漢古今名家詩文 **圭玷新評** 第五十三集 八月廿日發 定價五錢

右ハ元來邦人ノ詩文ヲ删評シタルモノヲ掲ケ來リシカ本集以下邦人ハ勿論文ハ韓柳歐蘇詩ハ李杜韓白等漢土ノ名家ト雖ヒ苟モ瑕瑾アルモノハ嚴正ヲ加ヘ大ニ詩文講究ノ便ヲ開カントス且集中ニ文藝雜話典故釋疑西洋英傑傳課題詩文等ノ諸篇ヲ設ケ頗ル修正ヲ加ヘタレハ益購讀アランコヲ希望ス

發行所 東京神田區雉子町 團々社

基督教新聞 第百六十一號 八月十八日發兌 一部代價金三錢

○社説(リバイバルに先導者なきを要ふる勿れ)○教報○雜錄(歐洲諸國宗敎改革の顛末)(牧師敎師の注意にまで)(茅屋一夕話)○雜報○英文教報○廣告

京橋區瀧山町六番地 警醒社

中外兵談

毎月二回發行●一冊代價現金拾錢郵税一錢●十冊代價郵税共前金一圓
●第二號八月廿三日發賣

●迅速艦ノ圖●將來ニ着目スベシ●甲鉄艦ト水雷艇トノ優劣●武功ハ文勳ト同視ス可ラズ●公使館附將校ノ資格及ビ其機密探知ヲ論ズ●佛國地中海艦隊實地演習記事●淸國事情芝罘ノ記●英國海軍本部ノ組織●支那ノ砲兵侮ル可ラズ●前哨軌範●淸佛談判始末●グラント將軍大勇美談●グラント將軍單騎重圍ヲ脱スル圖●軍中一夕話●淸國司令官ノ建議●支那兵備ノ狀況●此外雜話、官報、雜報數十件

東京本鄕區弓町一丁目廿番地(女學雜誌社隣) 中外兵談社

…價

一ヶ月分女學雜誌代價 十五錢 府外ハ十八錢
二ヶ月分同 三十錢 府外ハ三十六錢
三ヶ月分同 四十五錢 府外ハ五十四錢
半年分同 八十八錢 府外ハ一圓六錢
一年分同 一圓六十錢 府外ハ一圓九十六錢

…册。一…圓卅錢郵稅。卅…錢… (同前)

廣告

一行 一回 (廿八字詰) 前金拾錢
同 三回以上 一割引
同 六回以上 二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引

但し不道徳なる事物の廣告ハ謝絶す有益ある事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍ハ一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評す

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町(大賣捌) 巖々堂
東京神田區雉子町 團々社支店
同神田區佐柄木町 東海堂
同日本橋區新葭町 良明堂
同日本橋區馬喰町二丁目 自由堂
同京橋區木挽町壹丁目 萬字堂
同本鄕區元富士町 盛春堂
同本鄕區春木町二丁目 解明堂
同牛込區肴町 活神堂
大坂備後町四丁目 岡島支店
伊勢國松坂白粉町 家里初枝
東京芝西久保櫻川町(支局) 萬春堂

發行所 本局 東京本鄕弓町壹丁目廿番地 女學雜誌社

持主兼編輯人 巖本善治
印刷人 森田豐

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY